

和文化学習プログラムの作成

－ 保健体育科における杖道の学習効果を中心として －

大畑 和典 上本 富士夫 / 浅川 潔司

研究目的

学習指導要領の改訂に伴い、中学校保健体育科に武道が必修とされた。学習指導要領には武道の学習にあたっては「…、技ができる楽しさや喜びを味わい、基本動作や基本となる技ができるようにする。また、武道の学習に積極的に取り組み、伝統的な行動の仕方を守ることなどに意欲をもち、健康や安全に気を配るとともに、礼に代表される伝統的な考え方などを理解し、…」として、柔道・剣道・相撲を例示するとともに、「地域や学校の特別の事情がある場合には替えて履修させることもできる」としている。しかし、柔道や剣道、相撲は施設・設備の面で実施が困難であり、また、指導にあたっての安全確保についても課題が大きい。逆に杖道にはそうした課題はなく、それ以上に男女共修やマスゲーム的要素を取り入れた指導も可能というメリットがある。

その指導にあたっては平成23年度に作成した“杖道の手引き”にもとづき、この2名の体育科教員(全日本剣道連盟杖道初段)に加え、2名の高位有段者(同7段)を講師として招き、技術面はもちろん、礼儀、作法、精神面に至るまで細かい指導を心掛けてきた。

杖道は体育科の授業としての取り組みであるが、同時に和文化学習の柱の一つと位置づけ、単発的に行う和文文化に関する行事(鑑賞会や講演会、本物体験etc.)や各教科での投げ入れ授業、自作(地域)道徳教材等とともに、知識や技能にも増して礼節や謙虚さ、気遣いといった“和のこころ”を育み、伝統文化を尊重する態度を養うことも大きなねらいとしている。

本研究は中学校で3年間、杖道を学習することで、学習者は何を感じ、どう変容するか、杖道の和文化学習教材としての有効性を検証することを目的とする。

研究方法

1) 対象者

H県H市立S中学校生徒 第1学年(38名)、第3学年(57名)

2) 実施(指導)時期

平成22年度～平成24年度 各年度12単位時間の体育科における杖道指導

3) 実施(指導)内容と留意点

[1年次]

- ・指導内容：座礼、立礼、基本の構え(常、本手、逆手、引落)、基本打ち(本手、逆手、引落)形(一本目「着杖」、二本目「水月」)
- ・指導の留意点や評価の観点等
 - a) 礼の徹底で武道に対する心構えをしっかりと意識させ、真剣に取り組む姿勢をつくる。

- b) 基本的な技術を徹底指導し、習得させる。
- c) 高位有段者の演武を見せることで、目標を明示し、学習意欲の高揚を図る。
- d) 声と動作の大きさは密接な関係にあることを意識させる。
- e) 相手を意識させ、尊重、協力する態度を養う。

[2年次]

- ・指導内容：座礼，立礼，基本の構え（1年次の再修），基本打ち（1年次の再修，返し突）形（1年次の再修，三本目「引提」）
- ・指導の留意点や評価の観点等
 - a) 武道に対する心構えをより明確に意識させ、真剣に取り組む姿勢をつくる。
 - b) 基本的な技術を復習し、徹底指導のもとに形を習得させる。
 - c) 高位有段者の演武を見せることで、自分の技を振り返り、弱点等を自覚させる。
 - c) 相手を意識させ、尊重、協力する態度を養う（目での会話）。
 - d) 体育大会でマスゲームを行い、達成感を味わう。

[3年次]

- ・指導内容：座礼，立礼，基本の構え（2年次の再修），基本打ち（2年次の再修）形（2年次の再修，四本目「斜面」，五本目「左貫」）
- ・指導の留意点や評価の観点等
 - a) 最終学年であることを意識させ、作法や基本の確認と仕上げへ向けての心構えをつくる。
 - b) 基本形の複雑な組み合わせによる高度な形を習得し、達成感を味わう。
 - c) 試合や審判を経験させ、より高度な気づきを仕組み、技術向上の意欲を喚起する。
 - d) 高位有段者の演武（1～12本目）を見せることで、“杖道”の奥深さを感じさせる。

4) 調査時期と調査内容

調査は平成24年9月に行い、3年間及び1年間の杖道指導を終えた生徒に対し、学習後記の作成を求めた。

その学習後記について、学習成果と思われる語彙を抽出し、その出現頻度に対して分析を行った。

結果と考察

杖道の指導の効果を検証するために、まず、1学年(38名)と3学年(57名)の学習後記(500字～800字)に記述された杖道に対する態度・心情や効果とみられる語彙の出現する割合を算出した。次に、その語彙(5名以上が述べている語彙22項目)の有無をもとに数量化Ⅲ類による分析を試みた。カテゴリースコア値の順に語彙を並べ替え、語彙番号とした。また、各学年及び全体での出現割合を算出した。その結果を表1に示す。

これによると、全体では15)「面白い・楽しい・やってよかった・続けたい」(58.9%)、9)「日常生活に役立つ」(51.4%)、14)「杖道の上達」(33.6%)、6)「相手のことを考える・協力する・思いやる」(32.7%)といった

語彙が多く記述されていることから、杖道の学習を非常に肯定的にとらえている様子がうかがえる。

また、これを学年で比較すると、9) (前述) [73.4%>32.5%], 4) 「自己の成長・心を鍛える・精神力」 [33.3%>5.0%], 6) (前述) [47.4%>32.5%], 3) 「感謝」 [26.3%>5.0%], 2) 「心が落ち着く・平常心・心の切り替え・けじめがつけられる」 [21.1%>0.0%] において大きな差が見られ、3 学年での出現頻度が高いことがわかる。逆に、20) 「姿勢が良くなった」

[8.8%<27.5%], 15) (前述) [57.9%<75.0%], 18) 「相手は味方・相手との絆・信頼」 [5.3%<20.0%] では 1 学年の出現頻度が高くなっている。

さらに項目を吟味すると、語彙番号が小さい群は、杖道そのものより心的な成長を表し、大きい群は杖道から受ける印象や技術的なものを表していると思われるが、総じて 3 学年は番号の小さい語彙の出現頻度が高く、逆に 1 学年は番号の大きい方に多い傾向がみられる。このことは杖道の学習を通して、当初は杖道の魅力や技術的なものへの関心を強く感じているが、学習を重ねることで、杖道の魅力はもちろん、それに加えて、杖道をとおして得られる人間的な成長を強く感じるようになっていくことが推測される。

このことを吟味するために、教員 5 名により語彙の表している内容に基づき分類を行った。その結果 4 つのカテゴリーに分けることができた。その際、教員間で異なるカテゴリーに分類された項目については協議の上、カテゴリーを決定した(表 2)。この分類に基づき、それぞれのカテゴリー(C I ~CIV)について各サンプルの出現頻度を調査して、項目数で除した値を評価の下位尺度得点とし、下位尺度それぞれについて学年(2)×性(2)の 2 要因分散分析を行った。その結果、C I [人間的成長(情動的評価)]の学年間にのみ有意な差が

表 1 語彙の出現割合と数量化Ⅲ類による分析結果

語彙の出現割合				語 彙 (6 名以上が記述していた語彙)	数量化Ⅲ類 カテゴリスコア
全体	3 学年	1 学年			
1) 5.6%	10.5%	0.0%		自信がついた	-2.1708
2) 11.2%	21.1%	0.0%		心が落ち着く・平常心・心の切り替えができる	-1.6285
3) 15.9%	26.3%	5.0%		感謝	-1.4383
4) 19.6%	33.3%	5.0%		自己の成長・心を鍛える・精神力	-1.1020
5) 8.4%	14.0%	2.5%		腰・関節の使い方・無駄のなさ	-0.9365
6) 32.7%	47.4%	20.0%		相手のことを考える・協力する・思いやる	-0.6611
7) 6.5%	12.3%	0.0%		忍耐力	-0.6560
8) 21.5%	28.1%	17.5%		和文化の良さ・理解	-0.5969
9) 51.4%	73.7%	32.5%		日常生活に役立つ	-0.4580
10) 23.4%	29.8%	20.0%		挨拶・礼儀・マナー	-0.4124
11) 12.1%	14.0%	12.5%		後世・他校へ伝えたい	-0.2039
12) 52.3%	63.2%	50.0%		集中力がつく	0.0821
13) 17.8%	17.5%	22.5%		相手と心や呼吸を合わせる	0.0890
14) 33.6%	31.6%	45.0%		杖道の上達	0.3227
15) 58.9%	57.9%	75.0%		面白い・楽しい・やってよかった・続けたい	0.4950
16) 15.0%	14.0%	20.0%		相手の目を見て聞く・話す・聞けるようになった	0.5681
17) 4.7%	7.0%	2.5%		気づく	0.6698
18) 10.3%	5.3%	20.0%		相手は味方・相手との絆・信頼	0.7808
19) 15.9%	14.0%	22.5%		大きな声が出せるようになった	0.9725
20) 15.0%	8.8%	27.5%		姿勢が良くなった	1.9924
21) 7.5%	1.8%	17.5%		気迫を感じる	3.6951
22) 4.7%	3.5%	7.5%		杖道は美しい	4.0213

網掛けは出現割合が20%を超えるもの、下線は学年による差が大きいものを表す

表 2 各カテゴリーに含まれる項目

【C I : 人間的成長(情動的評価) 5 項目】

- 15) 挨拶・礼儀・マナー
- 21) 自己の成長・心を鍛える・精神力
- 16) 感謝
- 22) 心が落ち着く・平常心・心の切り替え・けじめがつけられる
- 3) 自信がついた

【C II : 伝統文化、杖道の知識・技能的評価 8 項目】

- 18) 面白い・楽しい・やってよかった・続けたい・素晴らしい
- 12) 杖道の上達
 - 1) 和文化の良さ・理解
 - 28) 気迫を感じる
 - 2) 後世・他校へ伝えたい
 - 17) 杖道は美しい
- 26) 相手は味方・相手との絆・信頼
- 19) 気づく

【C III : 人間的成長(生活改善) 5 項目】

- 4) 集中力がつく
- 14) 日常生活に役立つ
- 13) 姿勢が良くなった
- 29) 大きな声が出せるようになった
- 23) 忍耐力

【C IV : 人間的成長(他者との関係) 4 項目】

- 7) 相手と心や呼吸を合わせる
- 10) 相手のことを考える・協力する・思いやる
- 8) 相手の目を見て聞く・話す・人の話が聞けるようになった
- 6) 腰・関節の使い方・無駄のなさ

みられた(表3, 図1)。

C I 及び有意差はみられないもののC III[人間的成長(生活改善)]では3学年の得点が高いことが分かる。また, CIV[人間的成長(他者との関係)]については, 両学年とも女子が高い得点を示した。これらのことは先の数量化Ⅲ類にみられた傾向を裏付けるものと考えられる。すなわち, 杖道の学習を通して伝統文化や杖道の魅力を感じているが, それ以上に学習を重ねることで, 人間的成長が図られるという効果である。

まとめ

本研究は教育課程に和文化学習を位置づけ, 古来から伝わる種々の武道体験や伝統芸能, 文化に触れ, また教科の授業に於いても和文化学習を積極的に取り入れた学習活動を日常的に行っている中学校に於いて, 体育科・杖道に特化してその効果を検証しようとしたものである。当然, 日頃の教育活動に於いて和文化学習が推進されていることから, そのねらいとする“和のこころ”が育まれて, 学年を重ねるにつれてその効果が上がっているだろうことは想像に難くない。したがって, 杖道に限定して, その効果検証することには限界がある。とは言え, 自由記述による学習後記にみられる杖道に対する肯定的評価の多さは, 杖道を通して感じられ, また, 育まれている効果ととらえることができよう。

また杖道は, 指導要領に例示されている前述の武道とは異なり, いわゆる形武道であり, 「相手の動きに応じた基本動作から, 基本となる技を用いて攻防を展開」とは言い難いととらえられる向きもあるが, 決してそうではない。杖道における技には相手の動きを予測・判断し, それに応じた間合いや動きが必要である。さらに「試合」では, 杖と太刀のペア2組によって技のキレや迫力, 調和等が評価される。そうした「試合」では「相手の動きに応じた攻防」が展開され, それを評価(審判)する中で学習後記に見られた「気づき」がある。それは「基本となる技を用いた攻防」というに値するものと考えられる。

今後, 和文教材としての杖道の良さを追究し, 技術の修得とともに伝統的な考え方を理解させ, “和のこころ”の育成に努めていきたい。

主な参考・引用文献

- 東広島市立志和中学校(編)(2011)『杖道の手引き』～中学校武道必修化へ向けて～
人間研究協議会(編)(2008) 伝統・文化の教育 金子書房
梶田叡一(2009) 和魂ルネッサンス あすとり出版
文部科学省(2008) 中学校学習指導要領, 学習指導要領解説・保健体育編

表3 各カテゴリーの分散分析結果

		3年		1年		学年差 F値	性差 F値	交互作用 F値
		男	女	男	女			
[人数]		[33]	[24]	[12]	[26]			
CⅠ	得点	.21	.28	.08	.05	25.22**	0.34	1.99
	SD	.19	.19	.13	.11	3年/1年	ns	ns
CⅡ	得点	.20	.20	.22	.25	1.68	0.26	0.23
	SD	.12	.14	.14	.10	ns	ns	ns
CⅢ	得点	.33	.36	.28	.28	2.24	0.04	0.13
	SD	.20	.18	.28	.18	ns	ns	ns
CⅣ	得点	.18	.25	.19	.23	0.02	1.49	0.07
	SD	.18	.18	.16	.27	ns	ns	ns

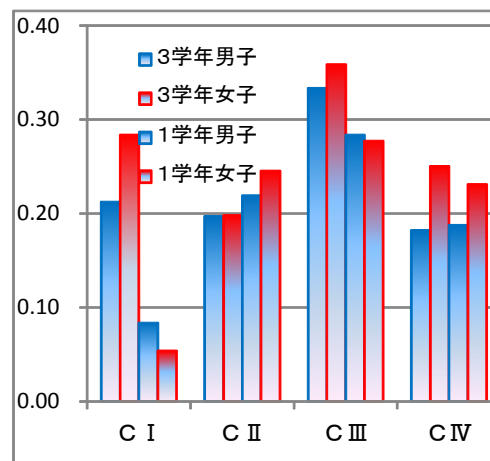


図1 各カテゴリーの得点分布状況